【査読あり】

大学生ピア・サポーターが有する peer としての資質に関する一考察
――所属コミュニティに抱く認識から――

梅　原　　聡*1，小　林　智　裕*2
（立命館大学人間科学研究科*1）

UMEHARA Satoshi*1, KOBAYASHI Tomohiro*2
（Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University*1）

Peer support has been attracting attention as a way to deal with recent college students who are facing maladjustment issues. University students who engage in student support activities are called peer supporters, and they belong to peer support groups and do their activities. Trevor Cole（1999）argued that peer support activities promote students' adjustment by utilizing the influence of "peers". It is a characteristic of peer supporters to recognize other university students as peers, and they may possess such qualities. However, no research has been conducted to clarify these qualities. Therefore, this study aimed to clarify the qualities of peer supporters from the perspective of whether their experience in peer support activities affects their recognition of other university students in their community as peers. The results showed that students who had belonged to peer support groups perceived students in communities as their peers more than others. In addition, it was indicated that these qualities can be acquired through going up a grade in university and experiences of support activities. It is thought that the qualities and influence of peer supporters can contribute not only to support activities, but also to the creation of friendships in various communities, though many issues have arisen in the operation of peer support activities at universities. Therefore, it is necessary to improve the training contents and the activity environment, and to provide support for peer supporters to utilize their qualities and power.

不適応という課題を抱える昨今の大学生への対処として着目されているのがピア・サポートである。学生支援活動を行う大学生はピア・サポーターと呼ばれ，ピア・サポート活動団体に所属し活動している。トレバー・コール（1999）は，ピア・サポート活動は「peer」の影響力を利用して学生の適応を促進すると述べている。他の大学生をピアな存在として捉える点こそがピア・サポーターの特徴であり，ピア・サポーターはそうした資質を備えているのではないだろうか。しかし，それらを明らかにする調査は行われていない。そこで本研究では，大学生活で関わりを持つ，様々なコミュニティに所属する他の大学生に対して抱くピアとしての認識が，ピア・サポート活動経験等によって異なるのかという観点から，ピア・サポーターの資質を明らかにすることを目指した。本研究結果より，ピア・サポート活動団体への所属経験のある学生は，より多くのコミュニティで自らが関わる学生をピアな存在と捉えていることが分かり，その資質が示された。こうした資質は在籍年数やピア・サポート活動経験を重ねることで養われることも示唆された。また，ピア・サポーターの持つ資質や影響力は，支援活動のみならず，多様なコミュニティでの仲間形成や関係維持に貢献できると考えられる。大学においてピア・サポート活動の運用に多くの課題が生じている今，課題の解決はもとより，研修内容や活動環境を整備し，ピア・サポーターが自己の資質や力を十分に発揮するための支援が求められる。

Key Words : peer support, maladjustment, Student support, University student
キーワード：ピア・サポート，不適応，学生支援，大学生

1. 目的と背景

近年，大学生の不適応が課題として挙げられるようになってきた。西河・坂本（2005）によれば，青年期にあたる大学生は環境の変化に伴うストレスや，アイデンティティの確立という発達課題を抱え，心理社会的不適応の生じやすい時期である。谷島（2005）は大学生の不適応について，学力に限定されず，人間関係や社会生活での不適応の増加を指摘しており，その対応の必要性を説いている。大学生はサークルやアルバイト等の多くの集団に所属する傾向にあり，学校内だけでなく学校外にも対人関係が広がりやすい（石本 , 2010）。このように，大学生は人間関係を要因とした不適応が生じやすい環境に置かれていると言える。このような状況下において，大学教育の分野では，文部科学省中央教育審議会の答申（2012）を契機にアクティブ・ラーニングの導入を推奨し，グループワークやディベートといった協働的な学びの場や学習共同体づくりが盛んとなった。半強制的に形成されるグループでの発表，それに伴う授業時間内外における準備のための協働等，授業という枠の中でも人間関係の形成や維持を求められている。このように授業内外にかかわらず集団に所属することが求められ，不適応のリスクはさらに高まったと言わざるを得ない。しかし須長（2010）が指摘しているように，大学においてチームで協働する能力の育成を担うカリキュラム整備は不十分である。クラスメイトとのコミュニケーションはもちろん，グループワークを用いた授業でのコミュニケーションも大半は学生各々の能力に依存するものであり，対応が急がれる。

こうした状況の打開に向けて，大学教育現場では教職員からの支援だけではなく，学生同士で助け合うピア・コミュニティの形成を推し進めている。通称「廣中レポート（文部省高等教育局 , 2000）」や日本学生支援機構答申（2009）でも，教職員の手が届かない範囲の支援を学生に担わせることで，課題を抱えた学生のみならず，その支援にあたった学生の成長を見込んでいる。こうした試みの中心に掲げられているのが，ピア・サポートである。元々福祉領域で展開されていたピア・サポートは，大学教育において「学生生活上で支援（援助）を必要としている学生に対し，仲間である学生同士で気軽に相談に応じ，手助けを行う制度」（日本学生支援機構，2009）と定義され，上記の廣中レポートを契機に日本の大学でも導入が進んだ。立命館大学では約 3000 名のピア・サポーター（ピア・サポート活動に従事する学生の総称）が活動しており（e.g., 沖 , 2017: 川那部 , 2017），法政大学のピアネット（近藤･手呂内･土屋・市川・安納・矢野・木原 , 2014）や愛媛大学の SCV（泉谷・山田 , 2013）等，活動事例は全国に広がっている。

授業内外問わず非常に大きな期待を背負うピア・サポートであるが，その効果はピア・サポーター個人の能力差によって大きく左右されるのでは，という疑問が生じるのは当然の流れである。この疑問に対して，トレバー・コール（1999 バーンズ亀山・矢部訳 2003）は，ピア・サポート活動は「peer」の影響力を利用して学生の適応を促進すると述べている。こうしたピア・サポート活動が実現するためには学生間の関係性が重要であり，学生が支援する相手をピアな存在であると認識する必要があるのではないだろうか。まず，他の大学生をピアな存在と捉えることが前提にあり，またそうした対象と捉えた時に，自らとピアな関係である相手にとって必要な（またはそう考えられる）支援を実施する。そうしてピアな関係を活かしたサポートが実現するのであろう。筆者らは他の大学生をピアな存在として捉える点こそがピア・サポーターの特徴であり、ピア・サポーターはそうした資質を備えていると考える。しかし，ピア・サポーターが持ち合わせるそうした資質を明らかにする研究はこれまで行われていない。ピア・サポーターは他の学生と比べ，こうしたピアとしての認識を特別に有するのだろうか。

本研究はこの疑問，ひいてはピア・サポーターが有する資質を明らかにする一歩として実施するものであり，大学生活で関わりを持つ様々なコミュニティに所属する他の大学生に対して抱くピアとしての認識が，ピア・サポート活動経験等によって異なるのかという観点から検討するものである。ピア・サポーターの資質の一端を明らかにし，大学生の課題に対処する，より明確で有益な計画立案の一助と

なることを目的とする。

また，これまでの大学生の適応に関する調査が，サークル活動等ひとつの所属集団についてのみの調査であったことを踏まえ，本研究では大学生が日々の生活で所属する，授業で形成する集団等を含めた多様なコミュニティを対象に横断的な調査を行うこととする。

2. 調査方法

2. 1. 調査対象者

本研究の調査対象者は，同一の大学に通う学生764 名であり，データに欠損の無い 618 名（有効回答率 80.89%）を有効回答と判断する。このうち男性320 名，女性 289 名，不明 9 名，そして大学 1 回生が 314 名，2 回生は 198 名，3 回生は 80 名，4 回生以上（大学院生含む）は 26 名である。また，現在ピア・サポート活動団体に所属している，または過去に所属したことがある学生は 260 名，所属したことがないと答えた学生は 358 名である。

2.2. 回答方法

対象大学の学生が誰でもアクセスできる質問票をインターネット上で作成，設置する。回答を求めるにあたり，質問票へのアクセスが可能な URL，及び QR コードが記載されたチラシを配布する。

2.3. 倫理的配慮

質問票にアクセスし最初に表示されるページに，本研究の趣旨と結果の公表について，得られたデータは適切に管理し学術研究以外の目的では活用しないこと，プライバシーの保護について最大限配慮するものであり個人が特定される恐れがないこと，調査参加は自由意志であり同意後も参加を取りやめることが可能であること，また取りやめたことによる不利益が生じないことについて詳細に示し，すべてに同意した場合にのみ回答が可能となるものとする。回答終了後はインターネットを介して回答結果が提出される。

2.4. 提示課題

本研究では調査対象者である大学生が，どのような場やコミュニティで関わる学生をピアだと認識しているのかを明らかにするために 10 の範囲を示し，それぞれ 5 件法（あてはまる～全く当てはまらない）で回答を求める。10 の範囲は次の通りである。「1. 同じ活動集団（サークル，部活，活動団体等）に所属する学生」,「2. 同じクラスやゼミに所属する学生」,「3. 同じ小集団授業（語学，演習等 30 人程度の授業）を受講している学生」,「4. 同じ大講義を受講している学生」,「5. 同じアルバイトをしている学生」,「6. 同じ学部や専攻，学域に所属する学生」,「7. 同学年の学生」,「8. 大学内の『ピア・サポート活動団体』の学生」,「9. 同じキャンパスに通う学生」,「10. 同じ大学に通う学生」。なお，本研究では「ピアな存在」という言葉を用い，問いも「次の 1 ～ 10 の学生は，あなたにとって『ピア』な存在かどうか，あなたの考えに近いものを選択してください。」とする。「ピアな存在」については「同じ仲間と認識して互いに思いやることができ，支え合う実践活動（ピア・サポート）を行える存在」という教示を与える。上記の課題以外にも①性別②学年③ピア・サポート活動団体への所属経験有無についての回答を求め，③にて所属経験が無いと答えた学生に対しては，「あなたは今後ピア・サポート活動をしてみたいと思いますか。」という問いを示し，次の 4 つ「ピア・サポート活動をしてみたいとは思わない。」,「ピア・サポート活動団体に入らず，ピア・サポート活動をしてみたい。」,「報酬があればピア・サポート活動団体に入ってピア・サポート活動をしてみたい。」,「報酬がなくてもピア・サポート活動団体に入ってピア・サポート活動をしてみたい。」から回答を求める。

2.5. 分析の流れ

本研究は分析段階において 2 つの研究に分ける。研究 1 においては，10 の範囲で関わる学生に対して 5 件法を用いて得られた回答について，3 つの属性差「(1) 学生の所属学年」,「(2) ピア・サポート活動団体への所属経験の有無」,「(3) ピア･サポーター活動への参加意欲」の観点より平均値の差の比較を行う。「(1) 学生の所属学年」については 3 回生，

及び4回生以上の回答が少なかったことを踏まえ，1回生群と2回生以上群にて比較を行うこととする。研究2では，研究1で活用したデータに対し非階層クラスタ分析を用いることにより，各学生が有するピアとしての認識についてコミュニティを横断的に分析する。なお，本研究では5件法にて得られた回答（あてはまる～全く当てはまらない）を1～5点と得点化し検討を進める。

3. 結果

3.1. 研究1：属性差の検討

まず全調査対象者の回答から算出した各項目の平均値, 及び標準偏差を表1に示した。概観したところ,「1. 同じ活動集団（サークル，部活，活動団体等）に所属する学生」,「2. 同じクラスやゼミに所属する学生」,「8. 大学内の『ピア・サポート活動団体』の学生」は,「9. 同じキャンパスに通う学生」,「10. 同じ大学に通う学生」,「4. 同じ大講義を受講している学生」と比べて平均値が高い傾向にあることが分かる。平均値が比較的高かった「1. 同じ活動集団（サークル，部活，活動団体等）に所属する学生」,「2. 同じクラスやゼミに所属する学生」等は，日常的に関わりの深いコミュニティであり，関わる他者の顔を認識できる場であると考えられる。また「8. 大学内の『ピア・サポート活動団体』の学生」は日々学内でピアな関係を心がけた活動に取り組んでおり，その存在や役割が浸透している様がうかがえる。一方，比較的平均値が低かった「9. 同じキャンパスに通う学生」,「10. 同じ大学に通う学生」は所属人数の多い，規模の大きなコミュニティであり，対象が幅広く，全ての所属学生の顔を認識することは容易ではない。所属しているという事実はあるものの，クラスやゼミに所属する学生等と比べ，コミュニティ内での他者との関係性を具体的にイメージすることが難しいのではないか。実際にコミュニティのサイズとの関係性や相互作用の関連については多くの議論があり，ネットワークの成員数が心理的距離感と対応すると指摘するダンバー（2010）の説や，ある場において他者から受ける影響を検討したラタネ（1981）による社会的インパクト理論等が例に挙げられる。コミュニティの成員同士が認識し合い関係性を持つ、また作用可能な人数には限界あることが示唆されており，本研究結果と通ずる点があるのではないか。

研究1では，この結果をさらに詳しく検討するために，得られた回答を次の属性差,「(1) 学生の所属学年」,「(2) ピア・サポート活動団体への所属経験の有無」,「(3) ピア･サポーター活動への参加意欲」の観点から，平均の差の検定を用いて比較した。比較に当たっては t 検定を用い，F 検定により等分散が仮定できる場合は Student の t 検定を，等分散が仮定できない場合は Welch の t 検定を用いた。

(1) 学生の所属学年について比較（表2）

まず F 検定の結果,「1. 同じ活動集団（サークル，部活，活動団体等）に所属する学生」のみ等分散が仮定できなかった。そのため，この項目のみ Welch の t 検定を用い，他の項目については Student の t 検定を用い検討した。t 検定の結果，有意差が見られた7項目うち5項目「1. 同じ活動集団（サークル，部活，活動団体等）に所属する学生」（t（616）= -5.77, $p < 0.01$），「2. 同じクラスやゼミに所属する学生」（t（616）= -4.62, $p < 0.01$），「3. 同じ小集団授業（語学, 演習等30人程度の授業）を受講している学生」

表1　全調査対象者の平均値，及び標準偏差

	全体 (n=618)	
	M	*SD*
1. 同じ活動集団（サークル、部活、活動団体等）に所属する学生	3.73	(1.20)
2. 同じクラスやゼミに所属する学生	3.61	(1.21)
3. 同じ小集団授業（語学、演習等30人程度の授業）を受講している学生	3.28	(1.15)
4. 同じ大講義を受講している学生	2.72	(1.19)
5. 同じアルバイトをしている学生	3.24	(1.22)
6. 同じ学部や専攻、学域に所属する学生	3.26	(1.16)
7. 同学年の学生	3.05	(1.18)
8. 大学内の「ピア・サポート活動団体」の学生	3.47	(1.21)
9. 同じキャンパスに通う学生	2.82	(1.29)
10. 同じ大学に通う学生	2.75	(1.23)

表２　学生の所属学年について比較

	学年 1回生 (n=314) M	SD	2回生以上 (n=304) M	SD	t	
1. 同じ活動集団（サークル、部活、活動団体等）に所属する学生	3.46	1.24	4.01	1.10	-5.77	**
2. 同じクラスやゼミに所属する学生	3.39	1.24	3.84	1.15	-4.62	**
3. 同じ小集団授業（語学、演習等30人程度の授業）を受講している学生	3.19	1.14	3.38	1.16	-2.06	**
4. 同じ大講義を受講している学生	2.77	1.15	2.67	1.23	1.04	
5. 同じアルバイトをしている学生	3.06	1.21	3.43	1.21	-3.74	**
6. 同じ学部や専攻、学域に所属する学生	3.22	1.12	3.30	1.20	-0.89	
7. 同学年の学生	3.00	1.16	3.09	1.20	-0.97	
8. 大学内の「ピア・サポート活動団体」の学生	3.15	1.16	3.81	1.17	-7.04	**
9. 同じキャンパスに通う学生	2.92	1.17	2.72	1.28	2.06	**
10. 同じ大学に通う学生	2.86	1.22	2.64	1.36	2.04	**

†$p < 0.1$, *$p < 0.05$, **$p < 0.01$

（t（616）= -2.06, $p < 0.01$），「5. 同じアルバイトをしている学生」（t（616）= -3.74, $p < 0.01$），「8. 大学内の『ピア・サポート活動団体』の学生」（t（616）= -7.04, $p < 0.01$）においては，１回生の学生と比べ２回生以上の学生がよりピアな存在に当てはまると回答することが示された。一方，「9. 同じキャンパスに通う学生」（t（616）= 2.06, $p < 0.01$），「10. 同じ大学に通う学生」（t（616）= 2.04, $p < 0.01$）については，２回生以上の学生と比べ１回生の学生がよりピアな存在に当てはまると回答することが示された。

この結果より，２回生以上の学生がよりピアな存在に当てはまると回答した５項目においては，大学在籍年数に伴う大学内外でのコミュニティ形成状況が影響していると推察できる。クラスやゼミ等の授業に伴う場，また学内で活動するピア・サポート活動団体との関わり等の大学内でのコミュニティはもちろん，アルバイト等の大学外での活動も大学進学と同時にコミュニティ形成が始まることが多い。一方，大学に長く所属する２回生以上の学生と比べ１回生のほうがよりピアな存在に当てはまると回答した項目は，他の項目と比べ，コミュニティのサイズが大きい項目であった。こうした結果となった背景のひとつとして，１回生は２回生以上の学生と比べて，特定のコミュニティに所属していないことが考えられる。大学生は学生生活が進むにつれ，大学内外の特定のサークル等に所属する傾向があり（e.g., 全国大学生活協同組合連合会 , 2019），また学年を重ねる中で学部指定カリキュラムにおいてゼミナール等のクラスに割り振られることが多く（e.g., 柴原 , 2017: 伏木田 , 2019），本調査対象大学も例外ではない。渡辺（2014）は友人関係について，大学生活の後半において，複数の友人関係から友人を選択していると述べているように，段々と限定的なコミュニティ・友人関係を選択していく。大学への在籍年数を重ねる中で所属コミュニティを選択する（させられる）機会が増えていくが，入学直後はまだそうした所属コミュニティが具体化・詳細化されていないと言えよう。こうした所属コミュニティへの認識が結果に反映されているのではないだろうか。

(2) ピア・サポート活動団体への所属経験の有無について比較（表３）

F 検定の結果，「1. 同じ活動集団（サークル，部活，活動団体等）に所属する学生」のみ等分散が仮定できなかった。そのためこの項目のみ Welch の t 検定を用い，他の項目については Student の t 検定を用い検討した。有意差が見られた項目「1. 同じ活動集団（サークル，部活，活動団体等）に所属する学生」（t（616）= 6.78, $p < 0.01$），「2. 同じクラスやゼミに所属する学生」（t（616）= 4.89, $p < 0.01$），「3. 同じ小集団授業（語学，演習等 30 人程度の授業）を受講している学生」（t（616）= 3.12, $p < 0.01$），「5. 同じアルバイトをしている学生」(t(616)= 4.96, $p < 0.01$)，「8. 大学内の『ピア・サポート活動団体』の学生」（t（616）= 8.5, $p < 0.01$），いずれの項目もピア・サポート活動団体所属経験の無い学生と比べ，ピア･サポート活動団体所属経験のある学生が，よりピアな存在に当てはまると回答することが示された。この結果より，所属経験の有無の差異がピアな存在に対する認識に影響を与えていることが推察できる。所属経験のある学生は日々サポート活動に携わっており，ピアとしての認識や他者への思いやりを持つ感覚について活動を通して体感する中で，他の学生よりも

表３　ピア・サポート活動団体への所属経験の有無について比較

	ピア・サポート活動団体への所属経験 なし (n=358)		ピア・サポート活動団体への所属経験 あり (n=260)			
	M	*SD*	*M*	*SD*	*t*	
1. 同じ活動集団（サークル、部活、活動団体等）に所属する学生	3.47	1.24	4.10	1.05	6.78	**
2. 同じクラスやゼミに所属する学生	3.41	1.22	3.89	1.16	4.89	**
3. 同じ小集団授業（語学、演習等30人程度の授業）を受講している学生	3.16	1.13	3.45	1.16	3.12	**
4. 同じ大講義を受講している学生	2.74	1.14	2.69	1.26	-0.53	
5. 同じアルバイトをしている学生	3.04	1.20	3.52	1.19	4.96	**
6. 同じ学部や専攻、学域に所属する学生	3.22	1.14	3.31	1.19	0.93	
7. 同学年の学生	2.99	1.16	3.12	1.20	1.40	
8. 大学内の「ピア・サポート活動団体」の学生	3.13	1.17	3.93	1.10	8.59	**
9. 同じキャンパスに通う学生	2.89	1.19	2.72	1.29	-1.68	
10. 同じ大学に通う学生	2.81	1.24	2.68	1.36	-1.24	†

†$p < 0.1$, *$p < 0.05$, **$p < 0.01$

こうした感覚が研ぎ澄まされているのではないか。支援活動を通じた「支援する側」の学生の成長は多くの現場より報告されており（e.g., 鳥越ら , 2013; 泉谷･山田 , 2013; 秦ら , 2017），「仲間作り」（e.g., 西山･山本 , 2002）を担うピア・サポーターがこうした感覚を身につけることも十分に期待できるであろう。ピアとしての認識や他者への思いやりを持つ感覚を有したピア・サポーターは，日々自身が関わりを持つコミュニティに対してもそうした感覚を持って関係性や居心地等を測っているのではないだろうか。

もう１点考察すべき点は，「8. 大学内の『ピア・サポート活動団体』の学生」のみではなく，それぞれ「異なる特色のピア」な存在が生じると考えられる複数の場面（項目）に有意差が見られたことだ。異なる特色とは例えば，「1. 同じ活動集団（サークル，部活，活動団体等）に所属する学生」は，私立大学生活白書（2019）で大学生活（ライフ）として示される，正課内外活動以外の学生生活において，休み時間や食事の時間を一緒に過ごす等の，主に大学生活面において助け合いが生じ，「2. 同じクラスやゼミに所属する学生」，「3. 同じ小集団授業（語学，演習等 30 人程度の授業）を受講している学生」は主に学習面における助け合いが生じる。「5. 同じアルバイトをしている学生」は就業面における助け合いと考えられ，助け合う内容やそれに伴うピアとしての認識も異なると考えられる。「8. 大学内の『ピア・サポート活動団体』の学生」のみならず，こうした異なる特色を持つ項目においても，所属経験のある学生の方がピアな存在に当てはまると回答することから，ピア・サポート活動団体での支援活動に携わった経験は，多様な場での助け合う関係性の認識の助けとなると推察できる。

(3) ピア・サポーター活動への参加意欲について比較（表 4）

(1)（2）の結果より，大学在籍年数やピア･サポート活動団体への所属経験の有無がピアな存在の認識に大きな影響を与えることが示された。本項では後者により焦点を当て，ピア・サポート活動団体への所属経験の無い学生について，ピア・サポート活動への参加意欲の観点よりさらに細分化して検討する。具体的には「今後活動したいと思わない」，「ピア･サポート活動団体に入らずピア・サポート活動した

表４　ピア・サポーター活動への参加意欲について比較

	今後ピア・サポート活動してみたいと思うか A 思わない (n=167)		B PS団体に入らず活動したい (n=40)		C 報酬あれば活動したい (n=102)		D 報酬なくても団体で活動したい (n=49)		E PS活動団体所属経験あり (n=260)		多重比較結果 (BH法)						
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*	A-B	A-D	A-E	B-C	C-D	C-E	D-E
1. 同じ活動集団（サークル、部活、活動団体等）に所属する学生	3.35	1.21	3.88	1.07	3.33	1.37	3.82	1.11	4.10	1.05	†		**	†		**	
2. 同じクラスやゼミに所属する学生	3.26	1.19	3.80	1.14	3.36	1.29	3.71	1.14	3.89	1.16	†		**			**	
3. 同じ小集団授業（語学、演習等30人程度の授業）を受講している学生	2.98	1.10	3.43	1.08	3.21	1.22	3.45	1.00	3.45	1.16		†	**				
4. 同じ大講義を受講している学生	2.54	1.08	3.00	1.11	2.83	1.22	3.02	1.13	2.69	1.26		†					
5. 同じアルバイトをしている学生	2.94	1.19	3.35	1.08	3.03	1.23	3.14	1.27	3.52	1.19			**			**	
6. 同じ学部や専攻、学域に所属する学生	3.07	1.13	3.38	1.05	3.15	1.19	3.78	0.94	3.31	1.19		**			**		†
7. 同学年の学生	2.83	1.16	3.13	1.07	2.88	1.16	3.65	1.01	3.12	1.20		**	†		**		**
8. 大学内の「ピア・サポート活動団体」の学生	2.86	1.14	3.55	1.06	3.16	1.15	3.69	1.12	3.93	1.10	**	**	**		†	**	
9. 同じキャンパスに通う学生	2.69	1.17	3.08	1.21	2.95	1.18	3.29	1.17	2.72	1.29		**					**
10. 同じ大学に通う学生	2.63	1.21	2.85	1.25	2.93	1.26	3.10	1.25	2.68	1.36							

†$p < 0.1$, *$p < 0.05$, **$p < 0.01$

い」,「報酬があればピア・サポート活動団体で活動したい」,「報酬が無くてもピア・サポート活動団体で活動したい」の回答結果により4分類し, さらに「ピア・サポート活動団体への所属経験がある学生」群を加えた5群間で平均の差で比較を行った。また有意差が見られた項目に対しては多重比較を用いた。有意差が見られた項目は「4. 同じ大講義を受講している学生」と「10. 同じ大学に通う学生」を除く8項目であった。まず「1. 同じ活動集団（サークル, 部活, 活動団体等）に所属する学生」においては,「今後活動したいと思わない」群と「ピア・サポート活動団体への所属経験がある学生」群間,「報酬があればピア・サポート活動団体で活動したい」群と「ピア・サポート活動団体への所属経験がある学生」群間において有意差が見られ（F（4,154.32）=13.71, $p < 0.01$）,「ピア・サポート活動団体への所属経験がある学生」群は「今後活動したいと思わない」群と比べ（$p < 0.01$）, また「報酬があればピア・サポート活動団体で活動したい」群と比べ（$p < 0.01$）よりピアな存在に当てはまると回答することが示された。「2. 同じクラスやゼミに所属する学生」においては,「今後活動したいと思わない」群と「ピア・サポート活動団体への所属経験がある学生」群間,「報酬があればピア・サポート活動団体で活動したい」群と「ピア・サポート活動団体への所属経験がある学生」群間において有意差が見られ（F（4,155.65）=8.47, $p < 0.01$）,「ピア・サポート活動団体への所属経験がある学生」群は「今後活動したいと思わない」群と比べ（$p < 0.01$）, また「報酬があればピア・サポート活動団体で活動したい」群と比べ（$p < 0.01$）, よりピアな存在に当てはまると回答することが示された。「3. 同じ小集団授業（語学, 演習等30人程度の授業）を受講している学生」においては,「今後活動したいと思わない」群と「ピア・サポート活動団体への所属経験がある学生」群間において有意差が見られ（F（4,157.7）=5.02, $p < 0.01$）,「ピア・サポート活動団体への所属経験がある学生」群は「今後活動したいと思わない」群と比べ（$p < 0.01$）, よりピアな存在に当てはまると回答することが示された。「5. 同じアルバイトをしている学生」においては,「今後活動したいと思わない」群と「ピア・サポート活動団体への所属経験がある学生」群間,「報酬があればピア・サポート活動団体で活動したい」群と「ピア・サポート活動団体への所属経験がある学生」群間において有意差が見られ（F（4,156.01）=7.15, $p < 0.01$）,「ピア・サポート活動団体への所属経験がある学生」群は「今後活動したいと思わない」群と比べ（$p < 0.01$）, また「報酬があればピア・サポート活動団体で活動したい」群と比べ（$p < 0.01$）よりピアな存在に当てはまると回答することが示された。「6. 同じ学部や専攻, 学域に所属する学生」においては,「今後活動したいと思わない」群と「報酬が無くてもピア・サポート活動団体で活動したい」群間,「報酬があればピア・サポート活動団体で活動したい」群と「報酬が無くてもピア・サポート活動団体で活動したい」群間において有意差が見られ（F（4,160.1）=5.20, $p < 0.01$）,「報酬が無くてもピア・サポート活動団体で活動したい」群は「今後活動したいと思わない」群と比べ（$p < 0.01$）, また「報酬があればピア・サポート活動団体で活動したい」群と比べ（$p < 0.01$）, よりピアな存在に当てはまると回答することが示された。「7. 同学年の学生」においては,「今後活動したいと思わない」群と「報酬が無くてもピア・サポート活動団体で活動したい」群間,「報酬があればピア・サポート活動団体で活動したい」群と「報酬が無くてもピア・サポート活動団体で活動したい」群間,「報酬が無くてもピア・サポート活動団体で活動したい」群と「ピア・サポート活動団体への所属経験がある学生」群間において有意差が見られ（F（4,159.2）=6.63, $p < 0.01$）,「報酬が無くてもピア・サポート活動団体で活動したい」群は「今後活動したいと思わない」群（$p < 0.01$）,「報酬があればピア・サポート活動団体で活動したい」群（$p < 0.01$）, また「ピア・サポート活動団体への所属経験がある学生」群と比べ（$p < 0.01$）, よりピアな存在に当てはまると回答することが示された。「8. 大学内の『ピア・サポート活動団体』の学生」においては,「今後活動したいと思わない」群と「ピア・サポート活動団体に入らずピア・サポート活動したい」群間,「今後活動したいと思わない」群と「報酬が無くてもピア・サポート活動団体で活動したい」群間,「今後活動したいと思わない」群と「ピア・

サポート活動団体への所属経験がある学生」群間，「報酬があればピア・サポート活動団体で活動したい」群と「ピア・サポート活動団体への所属経験がある学生」群間において有意差が見られ（F（4,155.84）=25.64 , p < 0.01），「今後活動したいと思わない」群は「ピア・サポート活動団体に入らずピア・サポート活動したい」群（p < 0.01），「報酬が無くてもピア・サポート活動団体で活動したい」群（p < 0.01），また「ピア・サポート活動団体への所属経験がある学生」群と比べ（p < 0.01），また「報酬があればピア・サポート活動団体で活動したい」群は「ピア・サポート活動団体への所属経験がある学生」群と比べ（p < 0.01），よりピアな存在に当てはまらないと回答することが示された。最後に「9. 同じキャンパスに通う学生」においては，「今後活動したいと思わない」群と「報酬が無くてもピア・サポート活動団体で活動したい」群間，「報酬が無くてもピア・サポート活動団体で活動したい」群と「ピア・サポート活動団体への所属経験がある学生」群間において有意差が見られ（F（4,156.84）=3.50 , p < 0.01），「報酬が無くてもピア・サポート活動団体で活動したい」群は「今後活動したいと思わない」群と比べ（p < 0.01），また「ピア・サポート活動団体への所属経験がある学生」群と比べ（p < 0.01），よりピアな存在に当てはまると回答することが示された。

本調査では，「今後ピア・サポート活動団体において活動したい」と希望する学生を報酬の有無によりさらに2群で分けたが，2群間において回答に差が見られた。「報酬が無くてもピア・サポート活動団体で活動したい」群は，表4に示された通り，特に大きなコミュニティに対しピアな存在に当てはまると回答することが示された。特筆すべき点は，「ピア・サポート活動団体への所属経験がある学生」よりも高い項目（「7. 同学年の学生」，「9. 同じキャンパスに通う学生」）が見られる点である。日々ピア・サポート活動に携わる学生が他者へ持つピアとしての認識や思いやりを持つ感覚については前項で触れたが，そうしたサポーターの一員になりたいと希望する学生の方が，大きなコミュニティに対してはよりピアとしての認識を持っていることが示された。ピア・サポート活動の中で養われるピアを認識する感覚や他者への思いやりを持つ感覚もあるだろうが，ピア・サポーターになりたいという思いを持つ学生群はすでにそうした感覚を持っているとも考えられる。しばしばピア・サポートの類似活動として扱われるボランティア活動においては，活動動機としての「他者志向的動機」の存在が示唆されており（e.g., 伊藤 , 2004），活動未経験者からもその傾向がみられる。ピア・サポート活動においても同様に，活動参加前の時点において他者志向の意識や，伴う参加動機の存在が示唆されるのではないか。

一方，「報酬があればピア・サポーターの一員として活動したい」と答えた学生群においては，報酬が無くても活動したい学生群とは異なる結果が得られた。全体的にピアであるとの認識は低く，「今後活動したいと思わない」群と同程度にしか，各コミュニティの学生をピアとして認識していない群であった。この両群について，例えば「報酬があればピア・サポート活動団体で活動したい」群との比較では「6. 同じ学部や専攻，学域に所属する学生」，「7. 同学年の学生」等の大きなコミュニティの学生への認識に差異が見られ，「ピア・サポート活動団体への所属経験がある学生」グループとの比較では「1. 同じ活動集団（サークル，部活，活動団体等）に所属する学生」，「2. 同じクラスやゼミに所属する学生」，「5. 同じアルバイトをしている学生」，「8. 大学内の『ピア・サポート活動団体』の学生」等，具体的なコミュニティの学生への認識において差異が見られる。

以上より，ピア・サポート活動への参加意欲は，ピアとしての認識に影響を与えることが明らかとなった。加えて，今後ピア・サポーターとして活動してみたいと考える学生は，ピア・サポート活動団体に所属経験のある学生と比べ，大きなコミュニティに対して，より強くピアな存在であるとの認識を示すことが分かった。しかし，それは報酬希望の有無によって異なり，報酬を希望する学生群は今後活動してみたいと思わない学生群と同程度に，各コミュニティの学生をピアな存在に当てはまらないと認識していることが示された。

研究1では，大学在籍年数やピア・サポート活動所属経験，ピア・サポート活動への参加意欲，及び報酬獲得希望の有無が，各コミュニティで関わる学

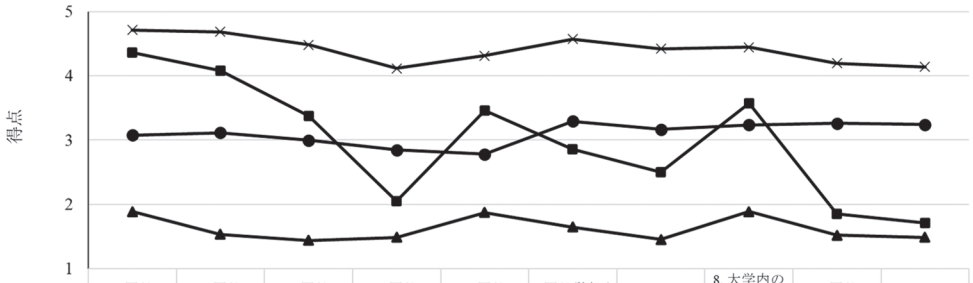
生に対して持つピアな存在の認識に影響を与えることが示唆された。

3.2. 研究 2：クラスタ分析による検討

研究 2 では各学生が有するピアとしての認識について，コミュニティを横断的に分析する。分析においては各 10 の範囲に対する回答値を投入変数とし，k-means 法によるクラスタ分析を実施した。解釈可能性を考慮した上で，4 クラスタ解を抽出した。各項目に対する各クラスタの回答平均値を図 1 に示す。クラスタ 1 は 62 名（10.03％），クラスタ 2 は 220 名（35.60％），クラスタ 3 は 132 名（21.36％），クラスタ 4 は 204 名（33.01％）であった。

各クラスタの特徴は，図 1 に示す。なお，本項で表記する点数は，5 件法にて得られた回答を 1 ～ 5 点と得点化したものである。まずクラスタ 1 は，いずれの項目も平均値が 1 点から 2 点の間，クラスタ 2 は平均値が 3 点前後であった。またクラスタ 3 については平均値が 4 点から 5 点の間であり，その平均値で各クラスタの差異が示される。他方クラスタ 4 については，「1. 同じ活動集団（サークル，部活，活動団体等）に所属する学生」，「2. 同じクラスやゼミに所属する学生」等の項目においては高い値が，「4. 同じ大講義を受講している学生」，「9. 同じキャンパスに通う学生」，「10. 同じ大学に通う学生」等については低い値が示される等，コミュニティに応じてピアな存在の認識が異なる傾向が見られた。この結果を踏まえ，各コミュニティの学生に対してピアな存在の認識が全般的に低いクラスタ 1 は「低度認識群」，いずれの学生に対しても中程度の回答傾向が見られたクラスタ 2 は「中度認識群」，高程度の回答傾向であったクラスタ 3 は「高度認識群」とした。また，各コミュニティの学生に対し異なる認識を示したクラスタ 4 を「認識差異群」と命名した。

次に，4 つのクラスタを占める各個人属性の比率について，「(1) 学生の所属学年」，「(2) ピア・サポート活動団体への所属経験の有無」，「(3) ピア・サポーター活動への参加意欲」の観点より，$\chi 2$ 検定を用いて分析した。(1) と (2) の集計結果は表 5 に，(3) は表 6 に示す。



	1. 同じ活動集団	2. 同じクラスやゼミ	3. 同じ小集団授業	4. 同じ大講義	5. 同じアルバイト	6. 同じ学部や専攻、学域	7. 同学年	8. 大学内のピア・サポート活動団体	9. 同じキャンパス	10. 同じ大学
低度認識群	1.89	1.53	1.44	1.48	1.87	1.65	1.45	1.89	1.52	1.48
中度認識群	3.08	3.11	3.00	2.85	2.78	3.30	3.17	3.24	3.26	3.24
高度認識群	4.72	4.69	4.48	4.12	4.32	4.58	4.42	4.45	4.20	4.14
認識差異群	4.36	4.09	3.37	2.05	3.46	2.86	2.50	3.57	1.85	1.71

図 1　各クラスタ所属学生の回答平均値

表 5　学年差，ピア・サポート活動団体への所属経験の差によるクラスタ特徴の検討

	学年					ピア・サポート活動団体への所属経験				
	1回生 (n=314)		2回生以上 (n=304)			なし (n=358)		あり (n=260)		
	n		n			n		n		
低度認識群	40	(12.74%)	22	(7.24%)	*	45	(12.57%)	17	(6.54%)	*
中度認識群	141	(44.90%)	79	(25.99%)	**	159	(44.41%)	61	(23.46%)	**
高度認識群	59	(18.79%)	73	(24.01%)		64	(17.88%)	68	(26.15%)	*
認識差異群	74	(23.57%)	130	(42.76%)	**	90	(25.14%)	114	(43.85%)	**
	$\chi 2$ = 39.4, df = 3					$\chi 2$ = 44.831, df = 3				
	†p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01					†p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01				

表６　ピア・サポート活動への参加意欲に関する回答によるクラスタ特徴の検討

	今後ピア・サポート活動してみたいと思うか														
	思わない (n=167)			PS団体に入らず活動したい (n=40)			報酬あれば活動したい (n=102)			報酬なくても団体で活動したい (n=49)			PS活動団体所属経験あり (n=260)		
	n			n			n			n			n		
低度認識群	27	(16.17%)	**	2	(5.00%)		15	(14.71%)	†	1	(2.04%)	†	17	(6.54%)	*
中度認識群	74	(44.31%)	**	10	(25.00%)		49	(48.04%)	**	26	(53.06%)	**	61	(23.46%)	**
高度認識群	20	(11.98%)	*	12	(30.00%)		18	(17.65%)		14	(28.57%)		68	(26.15%)	*
認識差異群	46	(27.54%)	†	16	(40.00%)		20	(19.61%)	**	8	(16.33%)	**	114	(43.85%)	**

$\chi 2 = 73.96$, $df = 12$
† $p < 0.1$, * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

まず,「(1) 学生の所属学年」で比較したところ（$\chi 2$（3）=39.4, $p < 0.01$），「低度認識群」（$z = 2.28$, $p < 0.05$）と「中度認識群」（$z = 4.91$, $p < 0.01$）には１回生の学生が多く，「認識差異群」（$z = 5.07$, $p < 0.01$）には２回生以上の学生が多く占めることが示された。次に「(2) ピア・サポート活動団体への所属経験の有無」で比較したところ（$\chi 2$（3）=44.83, $p < 0.01$），「低度認識群」（$z = 2.46$, $p < 0.05$）と「中度認識群」（$z = 5.37$, $p < 0.01$）は所属経験の無い学生が多く占める一方，「高度認識群」（$z = 2.48$, $p < 0.05$）と「認識差異群」（$z = 4.88$, $p < 0.01$）は所属経験のある学生が多く占めることが示された。最後に「(3) ピア・サポーター活動への参加意欲」による比較をしたところ（$\chi 2$（12）=73.96, $p < 0.01$），「低度認識群」には「今後活動したいと思わない」学生群が多く該当し（$z = 3.09$, $p < 0.01$），「ピア・サポート活動団体に所属経験のある学生」群の該当は少なかった（$z = -2.46$, $p < 0.05$）。「中度認識群」は「今後活動したいと思わない」学生群（$z = 2.75$, $p < 0.05$），「報酬があればピア・サポート活動団体で活動したい」学生群（$z = 2.87$, $p < 0.05$），「報酬がなくてもピア・サポート活動団体で活動したい」学生群（$z = 2.66$, $p < 0.05$）が多く該当し，「ピア・サポート活動団体に所属経験のある学生」群の該当は少なかった（$z = -5.37$, $p < 0.01$）。「高度認識群」は「ピア・サポート活動団体に所属経験のある学生」が多く該当し（$z = 2.48$, $p < 0.01$），「今後活動したいと思わない」学生群の該当は少なかった（$z = -3.46$, $p < 0.05$）。「認識差異群」は「ピア・サポート活動団体に所属経験のある学生」が多く該当し（$z = 4.88$, $p < 0.01$），「報酬があればピア・サポート活動団体で活動したい」（$z = -3.15$, $p < 0.01$），「報酬がなくてもピア・サポート活動団体で活動したい」群の該当は少ないことが示された（$z = -2.59$, $p < 0.05$）。

以上の結果を踏まえ，各クラスタに属する学生を次のように整理できる。「低度認識群」は，各コミュニティの学生に対しピアとしての認識が比較的低い群であり，１回生やピア・サポート活動団体への所属経験のない学生，また今後ピア・サポート活動をしたいと思わない学生群が多く該当する。「中度認識群」は，どのコミュニティの学生に対しても中程度の認識を示す群であり，「低度認識群」に多く該当する学生群の属性に加え，報酬の有無にかかわらずピア・サポート活動団体への所属を希望する学生群も多く該当する。「高度認識群」は，各コミュニティに対してピアとしての認識が比較的高い群であり，ピア・サポート活動団体への所属経験のある学生の該当が多い。「認識差異群」はコミュニティによってその認識が異なる特徴を持ち，「高度認識群」と同様にピア・サポート活動団体への所属経験のある学生の該当が多いが，なかでも２回生以上の学生が多い。この点については検討の余地を多分に残すが，強く示されるピアとしての認識はピア・サポート活動経験により養われたものであり，またコミュニティごとの差異は在籍年数を重ねる中でコミュニティ形成が進んだことが影響しているのではないだろうか。いずれの点も研究１にて述べたピア・サポート活動に従事する学生の成長（e.g., 鳥越ら , 2013: 泉谷・山田 , 2013; 秦ら , 2017），大学在籍年数を重ねる中での対人ネットワークの再構成（e.g., 南・山口 , 1992）と通ずる点があるだろう。

以上研究２では，学生が有する属性によって，各コミュニティで関わる学生に対して持つピアとしての認識が異なること，またその認識には一定の傾向

があることが示された。

4. まとめ

研究１から，大学在籍年数やピア・サポート活動所属経験の有無，ピア・サポーター活動への参加意欲の違い，及び報酬獲得希望の有無が，各コミュニティで関わる学生に対して持つピアな存在の認識に影響を与えることが示唆された。特に，ピア･サポート活動団体への所属経験のある学生は他の学生と比較して，より多くのコミュニティで関わる学生をピアだと捉えていること，またピア・サポート活動に参加意欲を示す学生の一部もまた，特定のコミュニティで関わる学生をピアな存在であると強く認識することが明らかとなった。

研究２からは，学生が有する属性によって，各コミュニティで関わる学生に対して持つピアとしての認識が異なること，またその認識には一定の傾向があることが明らかとなった。「高度認識群」,「認識差異群」等に所属する学生の多くが２回生以上やピア・サポート活動団体への所属経験のある学生であったことから，在籍年数やピア・サポート活動経験を重ねることで，ピアであると認識する感覚を養うことができると示唆された。

以上を踏まえると，ピア・サポート活動団体への所属経験のある学生や，ピア・サポート活動への参加を希望する学生の一部は，他の大学生と比べ多くのコミュニティに所属する学生に対しピアとしての認識を強く有するという点で，他の大学生をピアだと捉える資質を備えているのではないだろうか。また，ピア・サポーターはこうした他の大学生をピアであると捉える資質を手に，ピアな関係を活かしたサポートを実現するのであろう。そして，ピア・サポート活動は本稿冒頭で述べた大学生の適応促進にも貢献できるであろう。不適応の学生は正課内外の仲間形成や維持に苦労しており，それに対し仲間志向の重要性が指摘されている（森岡ら , 2018）。ピア･サポーターの影響力を利用することで，学生の適応促進に貢献することができるのではないか。つまり，ある集団にピア・サポーターが所属していることは，集団に所属する他の学生，特に不適応を感じている学生にとって大きな助けになると考えられる。また本研究により，ピア・サポーターが活動の中で養う資質や影響力を他のコミュニティでも同様に活かすことができる可能性が示唆された。つまり，他の学生をピアだと捉える資質を持つピア・サポーターが，ピア・サポート活動に限定されず，授業をはじめとした様々な集団に所属する状況を増やすことで，人間関係の形成・維持を要因とした不適応を防ぐ可能性が拡大するのである。そのため，ピア･サポーターを増やし，影響の及ぶ範囲を広げる必要がある。こうした資質や影響力をピア・サポート活動のみならず，様々な場面においても発揮しやすいよう環境を整えること，また彼ら自身が自らそうした可能性を有することに気付くことは，人間関係の形成・維持を要因とした「大学生の不適応」課題の解決貢献への道となるのではないだろうか。実際に，不適応課題へのアプローチを意識した相談対応を主とするピア・サポートプログラムも大学現場にて実践されている（王水・浦 , 2016）。

ただし本研究は新たな試みであり，課題も多く存在する。まず，本研究はある一時点での調査に過ぎず，変化を具体的に明らかにしたものではない。学生が学年や経験を積み重ねる中でどのようにピアとしての認識を変化させるのか，そのプロセスを明らかにすることで本研究課題を構造化して捉えることができるだろう。次に，実施した調査はあるひとつの大学のみを対象としたものである。ピア・サポート活動は所属学生の属性や大学固有の文化による影響を受け特色化するものであり，今後多くの大学機関での調査実施が望まれる。また，本研究では学生が認識する「ピアな存在」という点から，ピア･サポーターの資質や影響力を考察したものである。しかし，ピア・サポーターが持つピアとしての認識の強さと，彼らによる支援の効果はイコールではない。ピアとしての認識と，ピア・サポーターが有する影響力の関連性検討も課題である。

5. おわりに

先述したように，日本の大学教育においてピア・サポート活動の導入は広がりを見せている。この状

況をさらに発展させるため，ピア・サポーターを管轄する大学教職員は，研修内容や活動環境を整備し，彼らの資質や力を活かせるようにすることが求められる。しかし，ピア・サポート活動を導入する大学が増加傾向にある反面，学生たちの活動への参加促進は一部の大学を除いて進んでいない。日本学生支援機構（2011）の調査によれば，ピア・サポート活動に参加する学生が一部に限定されていることを課題に挙げる大学も多い。また大石（2010）は，ピア・サポーターとして活動する学生が，活動意欲の減退や活動辞退に至るという問題報告を示す。こうした課題は数年に渡り指摘されているが，明確な解決策は提示されていない。多くの学生が活動への参加の興味・関心を持てるような，また活動中のピア・サポーターが意欲減退や活動辞退に陥らないような工夫が必要であり，そのためにはピア・サポーターの活動動機構造にも目を向けてゆく必要性があるのではないか。ピア・サポーターが「peer」としての資質や影響力を有し，さらには大学生の不適応課題解消に貢献する可能性が示された今，その活動を維持，発展させる方策の模索が急務だろう。

引用文献

Cole, T.（1999）. *Kids Helping Kids*. Canada: Peer Resources.（コール , T. バーンズ亀山 静子・矢部 文（監訳）（2003）. ピア・サポート実践マニュアル 川島書店）

Dunbar, R.（2010）. *How Many Friends Does One Person Need?: Dunbar's Number and Other Evolutionary Quirks*: Faber & Faber.

伏木田 稚子（2019）. 教員からみた学部ゼミナールの授業外活動が有する価値の検討――人文学・社会科学・総合科学に着目して―― 日本教育工学会論文誌 *44*, 161-164.

石本 雄真（2010）. 青年期の居場所感が心理的適応 , 学校適応に与える影響 発達心理学研究 , *21 (3)*, 278-286.

伊藤 忠弘（2004）. 達成行動における「他者志向的動機」の役割 帝京大学心理学紀要 , *8*, 63-81.

泉谷 道子・山田 剛史（2013）. 体系的なピア・サポート活動による学生の学びと成長 大学教育実践ジャーナル , *11*, 61-67.

川那部 隆司（2017）. 立命館大学におけるピア・サポート団体間の連携を促す試み――課題と展望―― 立命館高等教育研究 , *16*, 55-64.

近藤清之・手呂内秀則・土屋貴之・市川さやか・安納隆介・矢野智樹・木原章（2014）. 法政大学におけるピア・サポーターとしての学生スタッフ育成の現状と課題 法政大学教育研究 , *5*, 15-38.

Latane, B.（1981）. The psychology of social impact. *American Psychologist*, *36*, 343-356.

南 博文・山口 修司（1992）. 大学生活への移行 山本 多喜司・S. ワップナー（編著）人生移行の発達心理学（pp. 179-204）北大路書房

文部科学省 中央教育審議会（2012）. 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて――生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ――（答申）

文部省高等教育局（2000）. 大学における学生生活の充実について――学生の立場に立った大学づくりを目指して――（報告）

森岡 茜・鹿田 優美・香川 香（2018）. 大学生における適応感と内的作業モデルおよびタイプ A 行動特性の関連性 関西大学臨床心理専門職大学院紀要 , *8*, 21-29.

日本学生支援機構（2009）. 大学，短期大学，高等専門学校における学生支援の取組状況に関する調査について（平成 20 年度）調査報告

日本学生支援機構（2011）. 大学，短期大学，高等専門学校における学生支援の取組状況に関する調査について（平成 22 年度）調査報告

日本私立大学連盟学生委員会（2019）. 私立大学学生生活白書 2018

西河 正行・坂本 真士（2005）. 大学における予防の実践・研究 坂本真士・丹野義彦・大野裕（編）抑うつの臨床心理学（.pp213-233）東京大学出版会

西山 久子・山本 力（2002）. 実践的ピアサポートおよび仲間支援活動の背景と動向――ピアサポート／仲間支援活動の起源から現在まで―― 岡山大学教育実践総合センター紀要 , *2*, 81-93.

大石 由紀子（2010）. 高等教育におけるピアサポート導入の教育的効果と期待 大学と学生 , *561*, 16-21.

沖 裕貴（2017）. 立命館大学のピア・サポート・プログラム――その特徴と課題，今後の展望―― 立命館高等教育研究 , *16*, 1-17.

柴原 宜幸（2017）. 大学教育における文科系専門ゼミに関する一考察 ――専門教育とキャリア教育との接点―― 開智国際大学紀要 *16*, 163-178.

秦 喜美恵・平井 達也・堀江 未来（2017）. 学生ピアリーダーの成長プロセスとその要因分析に関する質的研究――立命館アジア太平洋大学のティーチング・アシスタントへのインタビューをとおして―― 立命館高等教育研究 , *16*, 65-82.

須長 一幸（2010）. アクティブ・ラーニングの諸理解と授業実践への課題――activeness 概念を中心に―― 関西大学高等教育研究 , *1*, 1-11.

玉水 克明・浦 光博（2016）. 追手門学院大学のピア・サポーターが提供するサポートの分析 アサーティブ学習高大接続研究 , *1*, 39-49.

谷島 弘仁（2005）. 大学生における大学への適応に関する検討 人間科学研究 , *27*, 19-27.

鳥越 ゆい子・武 佐和子・川西 千弘（2013）. K 女子大学のピア・サポート活動における学生の成長――ピア・サポーターの成長に注目して―― 帝京科学大学紀要 , *9*, 45-56.

渡辺 舞（2014）. 大学生の友人関係は変化するか ?――大学 4 年間の追跡的検討による大学適応感との関連について―― 北星学園大学大学院論集 , *5*, 67-81.

全国大学生活協同組合連合会（2019）. 学生の消費生活に関する実態調査 CAMPUS LIFE DATA2018